

プラスチック爆弾は「生きられた公共建築」の夢を見るか？

平田研究室博士後期課程 大須賀嵩幸

生命がみずからの自由に形を与えるのは、すなわち生命が純粋な遺伝子決定論から離れるのは、ただ爆発物をつくることによるのみである。

カトリーヌ・マラブー

－生きられた公共建築

平田研究室にいること5年、最近ようやく、自分が目指したい建築が何なのか、少し言葉にできそうな気がしている。それはたぶん、「生きられた公共建築」なのだと思う。

使い手の経験が空間の質に同化した「生きられた空間」は、しばしば家をモチーフに語られてきた。「生きられた家」では家族という単一の主体が空間と密に結びつき、特定の使い手による空間への関わりが空間に違いを生み出すからだ。より大きな規模の建築において主体が多数になると、家でみたような主体と空間との一体化は困難になる。特に、建築の所有者と使い手が一致しない公共建築においては、不特定多数の使い手は普遍化、最大公約数化されてプログラムに組み込まれ、建築空間に翻訳される。そうして、生き生きと使われることから遠ざかっていく。

この「生きられた公共建築」という矛盾をはらんだ理想に近づくためには、生きられた質と多数性を架橋する手立てが必要だ。SNSで人々が共感し合い、VRやARで今ここにない空間さえ体験できるいま、さまざまな思いが渦巻く状況から建築を立ち上げていくことが現実味を帯びつつある。そのとき建築をつくることは、建築家によるリジッドな個性の表現や、言われるがまま何にでも変化するような柔軟性（フレキシビリティ）とは違う、別の様相を帯びてくるのではないだろうか。

－可塑性の可能性

脳化学の分野で注目される、可塑性（プラستیシティ）という概念がある。脳の可塑性とは、脳の神経細胞（ニューロン）をつなぐ接合部（シナプス）が個人の経験をもとにその伝達効率を変化させる性質のことだ¹。ここには可塑性の、「かたちを受け取る能力」と「かたちを与える能力」の相異なる2つの性質が含まれている。「粘土には可塑性がある」という時は「かたちを受け取る」ほうの意味で、塑造や造形芸術（l'art plastique）のような人が造形するというのは「かたちを与える」ほうの意味である。前者の例で可塑性は硬直性と対置され、後者では可塑性は柔軟性とも異なることが分かる。あるいは、可塑性はリジッドとフレキシブル、つくり手と使い手の間を行き来する、時間を内包した概念ともいえるだろう。

脳の可塑性によって形作られる私たちの脳は、私たちによって生きられた脳である。その脳のつくり手は、ほかでもない私たちだ（私たちはそれに気づいていないかもしれないが）。同じように建築の、かたちを受け取り・与えるインタラクティブなプロセスを考えることで、可塑性を生きられた質と結びつけた製作の概念として考えてみたい。

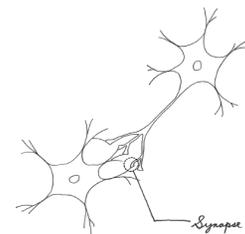


図1 ニューロンをつなぐシナプス

¹ 脳の可塑性は発達、調節、修復の3つのレベルで作用するという。

カトリーヌ・マラブー：わたしたちの脳をどうするか ニューロサイエンスとグローバル資本主義、桑田光平ら（訳）、春秋社、2005

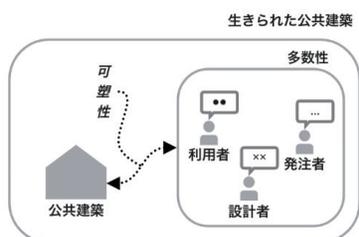


図2 生きられた公共建築

2 カトリーヌ・マラブー：ヘーゲルの未来－可塑性・時間性・弁証法，西山雄二（訳），未来社，2005

なお、マラブーは「ヘーゲルの未来」においてすでに可塑性の破壊的な側面に言及しているが、より重点的に扱われるのは「新たな傷つきし者」「偶発時の存在論」においてである。

3 カトリーヌ・マラブー：新たな傷つきし者——現代の心的外傷を考える，平野徹（訳），河出書房新社，2016

4 磯崎は図書館の設計において「建築が成長する」という機能上の要求に対し、時間的な各断面が常に次の段階に移行するプロセスと考える「プロセス・プランニング」の方法論を提示した。条件に応じて流動的に実態を変化させていくプロセスをある時点で「切断」することによって、建築が具現化されるという視点が示されている。

磯崎新：空間へ，美術出版社，1971

またエリー・デューリングは、現代アートが無限的なプロセスを重視していると批判した上で、オブジェとプロジェクトの間にまたがる形態としての「プロトタイプ」という概念を提唱している。プロトタイプはプロセスの切断において現れる予期的なオブジェであり、プロセスを無限に開くことよりもプロジェクトに可読性を与えることが重要だという。

エリー・デューリング：プロトタイプ 芸術作品の新たな身分，武田街也（訳），現代思想 vol.43-1〈特集〉現代思想の新展開 2015 思弁の実在論と新しい唯物論，pp.177-199，青土社，2014

5 大須賀嵩幸：つくる・すむ・ひらく「北大路ハウス」京都の建築学生による新しい公共建築の実験，新建築社，2020

－かたちを爆発させる

以上の仮説は、デリダのもとで博士論文を書き上げ、可塑性の概念をもってヘーゲルやハイデガーを読解し、神経科学や精神分析学に接近していくフランスの哲学者カトリーヌ・マラブーの仕事に影響を受けたものである。マラブー曰く、可塑性には「かたちを受け取る能力」と「かたちを与える能力」に加え、もっとも強烈な第3の意味があるという。それは「プラスチック爆弾」が想起させる「かたちを爆発させる能力」、すなわちかたちの消滅である²。この性質によって、可塑性はかたちの創造と消滅の二極の間に位置することとなる。

アルツハイマー病や自閉症、PTSD（心的外傷後ストレス障害）の患者は、脳損傷や心的外傷によって別人かのように人が変わってしまうことがある。破壊自体から別の形式が生まれるという否定的な意味での可塑性³は、神経科学や精神分析学でも避けられる対象である。しかし、連続性を切断するような破壊的な出来事を、2020年に私たちは経験した。新型コロナウイルスの感染拡大によってソーシャルディスタンスの概念が生まれ、すっかり変わってしまった世の中を生きるために、オンラインやリモートワークを取り入れた新しい生活様式が普及しつつある。

ほんとうに生きられた状態とは、かたちを受け取り・与える連続的なプロセスだけではなく、もっと予想外の偶発的なものに開かれていることではないだろうか。マラブーの爆発のメタファーは、あらかじめプログラムされている予定調和の変化ではないものを思わせる。かつて磯崎は建築の「切断」⁴について述べたが、それはあくまでかたちを受け取り・与える連続的なプロセスの上での出来事であった。ここではより直接的な、何かが消えてなくなる文字通りの「切断」をプラスチック爆弾を通して考えてみたい。

－あの案があったから

実は「可塑性」という概念そのものも、実際に建築の設計を通して浮かび上がり、少しずつ言葉になってきたところがある。traverse17で紹介した「北大路ハウス」の設計プロセスでは使い手とつくり手がどちらも建築学生という理想的状態のもと、かたちを与え・受け取るプロセスが実現した。ワークショップや投票を経て、いくつかの設計案から段々状に連なる大空間が特徴的な「ふるしき案」を選び取ったのだが、この形態が「日常・講演会・展示会の複数モードをもつ空間」という設計の指針となる概念を生み出し、その後のワークショップでは複数モードからの検討によってふるしき案の形状を具体的に決めていった⁵。

しかし、「北大路」の体験からは別の可能性も示唆されていた。設計の初期段階でふるしき案と同時に検討していた他の2案が、1案に決まった後の議論において浮かび上がってきたのだ。選ばれなかった案を通して考えたことが、具体的な平面プランや、素材の表現を決める手がかりになっている。それが可能だったのは、研究室メンバーと、継続的にワークショップに参加してくれた学生の間で密に議論が

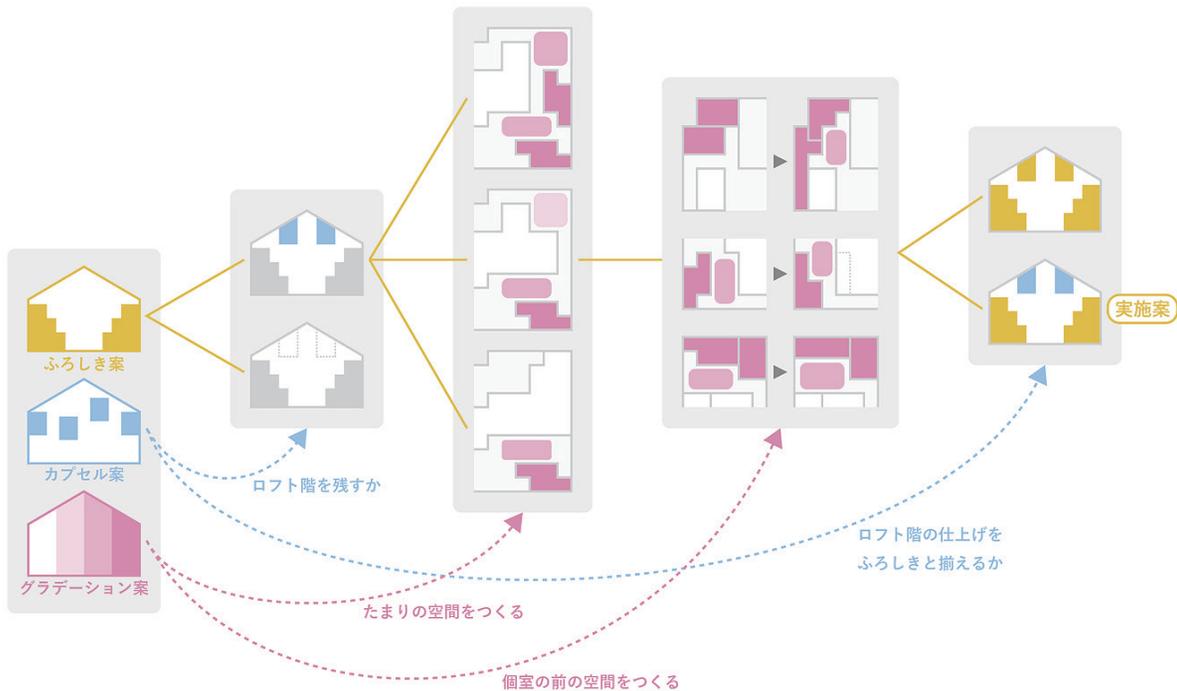


図3 「北大路ハウス」の設計プロセスにおける、案の関係

共有され、なくなった案のことを覚えていたからである。

建築を設計する際の案が生まれては消えていく過程に、可塑性の2つの意味を重ねてみる。1つは案が連続的に成長していく連続的な可塑性であり、もう1つは特定の案があったからこそ考えたことが、その案のかたちが消えても残るような、断絶的な可塑性である⁶。

6 「偶発事存在論」では「構造的な可塑性」と「破壊的な可塑性」という2分類がされている。
カトリヌ・マラブー：偶発事存在論 破壊的可塑性についての試論、鈴木智之（訳）、法政大学出版局、2020

一 桂新広場プロジェクト

「北大路」は設計対象があくまで家（公共性の高いシェアハウスではあるが）であり、「生きられた建築」を考えることが比較的スムーズに行なえた。不特定多数の人に使われる公共建築や屋外空間においても、「可塑性」の概念を手がかりとして、「生きられた公共建築」をつくれないうだろうか。

これから紹介する「桂新広場プロジェクト（仮）」は、京都大学のキャンパスの空き地に、学生の活動が見えるような屋外空間をつくる計画である。

計画地となる桂キャンパスは、京都市の中心部から離れた桂坂の中腹、高低差20mの敷地に位置する。大学院生を中心に全体で1500人ほどの学生が所属しているが、学生は研究室にこもりがちで、キャンパスで学生の活動を見かけることは滅多にない。このような状況に最初に異を唱えたのが、竹山先生と竹山研究室である。竹山研究室は桂キャンパスを対象として設計課題に取り組み、2018年度の「驚きと喜びの場の構想」は食堂に展示され、大きな反響を呼んだ。

竹山研の学生らののびやかな発想が工学研究科長・大嶋正裕先生の目に留まり、今回のプロジェクトにつながっていく。2019年の夏、大嶋先生から平田先生に「図書館と食堂の間にある空き地の利活用を考えてほしい」という話があり、平田研究室を中心に集まった有志の建築学生によって広場の設計がスタートした。



図4 「桂新広場プロジェクト」のポスター

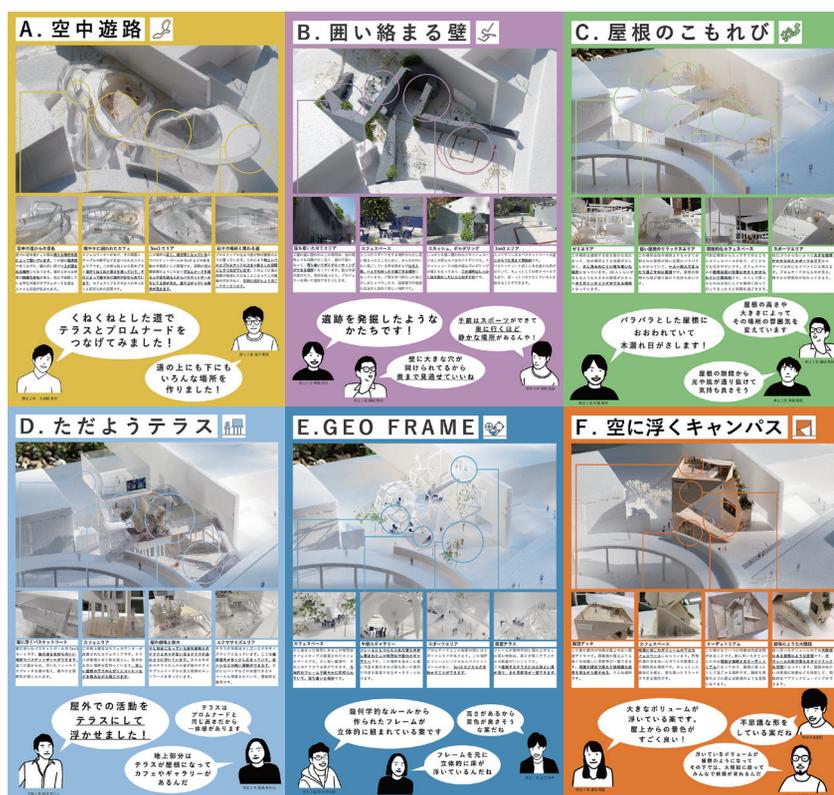


図5 6案の展示ポスター

一つくるとの狼煙を上げる

広場の敷地は新しくできた桂図書館（2020年4月開館、デザイン監修：岸和郎）の横だが、桂の学生は建設中の建物が図書館だとは知らなかったりもする。その横の空き地に広場をつくるにあたって、まずはほとんど何のイメージもないような場所に建築の素案を立ち上げる必要があった。そこで私たちは、特徴的な形態の6案をつくり、展示を通してキャンパス利用者の意見を集めることにした。斜に構えがちな京大生（僕なんかも特にそう）の声を聞くには、知らないところで勝手に進んでいるような不信感を与えてはまずい。いっそ、あり得る様々な可能性をなるべく多く提示して反応をみようと考えた。

6案のスタディはそれぞれのキャラクターが出るように、3系統に分けて進められた。細長い敷地に対して、さらに細長い形を折りたたみながら配置していく「道」系統の2案（A,B）。対照的に、水平的な広がりをもった屋根やスラブで場所をつくる「屋根」系統の2案（C,D）。敷地を目一杯使う他の系統に対し、局所的に高さのある象徴的な構築物を立ち上げる「オブジェクト」系統の2案（E,F）である。

一形にからまる意見

6案の模型とパネルを展示して案への投票や自由記述のコメントを募り、キャンパス利用者の意見を11個の概念として抽出した。以下、概念を【】、元データからの引用を〔〕で表し、いくつかの概念を紹介する。

展示した6案の具体的な形に対し、はっきりと賛否を示す意見が多くみられた。E,F案の展望テラスやA,B案の高いところを通る道といった【空に近い場所】へ

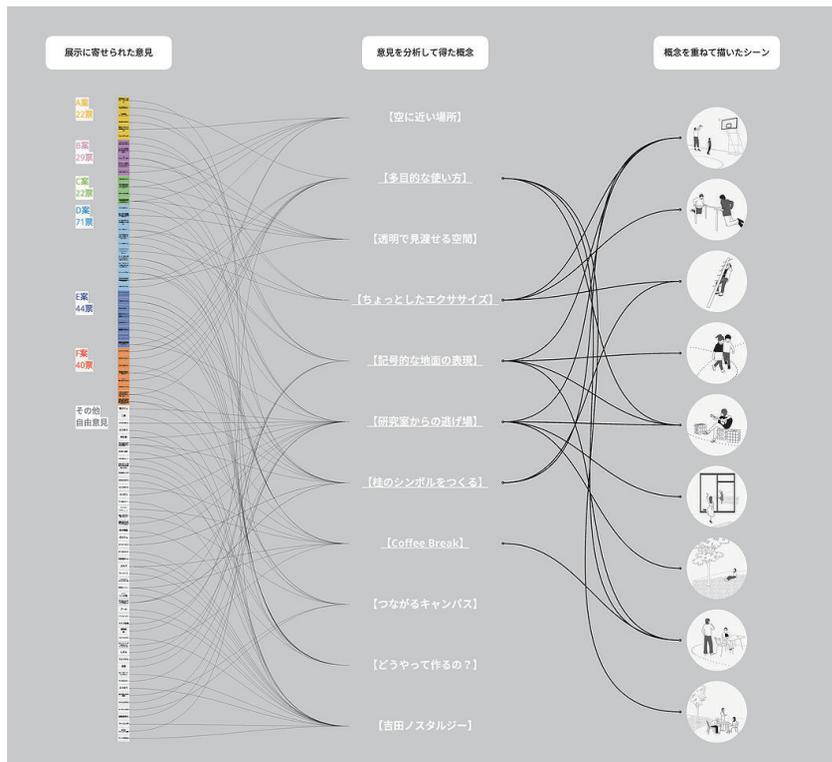


図6 展示の意見をシーンに翻訳する

の期待は、坂の上に立地する桂キャンパスのポテンシャルを引き出すものである。A,C,D案のように地上レベルには柱だけが立ち現れるような【透明で見渡せる空間】が好意的に捉えられ、壁で場所を区切っていくB案には「もうちょっと穴が空いていたらよさそう!」との意見が寄せられた。

場所のイメージに関する意見としては、どこか別の場所で「のんびり研究や勉強ができる」【研究室からの逃げ場 (アジール)】を求める声や、学部時代の市街地での生活を回顧する【吉田ノスタルジー】などがあつた。

投票の結果は、浮かんだバスケットコートが特徴的なD案に多くの票が集まり、反対に建築によって場所を囲いとするようなA,B案は少数派となった。展示のねらいはここをどんな場所にしたいかという思いを集めることであり、投票で1位の案をつくることではない。そこで次のフェーズでは、先の6案とは平行でありながら、展示で得られた意見とどこかで結びついた案を、模型やパネルとは別の想像力を働かせる仕方提示することが求められた。

—地面のしつらえを整える

私たちが選択した次の一手は、地面のしつらえを中心とした敷地の先行整備である。この場所を実際に使えるようにし、具体的に場所を体験して広場のイメージをつくり上げていくことを考えた。

提案のベースとして、土を盛り掘りしておおらかに敷地を分ける地形を作り、その上に活動の手がかりとなる要素をちりばめていった。

図書館側のすり鉢状に囲まれた低地には日陰ができ、本を読んだり、屋外でゼミをするのにちょうどいい。ここにはさまざまな人数で【多目的な使い方】ができるように、動かせる家具を並べている。

一段上がった平場には【ちょっとしたエクササイズ】のきっかけとして、可動式のバスケットゴールと、健康器具を用意した。白く抽象的な形をしたこれらの器具には、広場の開放性を示すモニュメントとしての意味も込めている。キャンパスの



図7 地面整備案のスタディ模型

あちこちに転がっていた木製キューブも白塗りすることで広場の要素に取り込み、サイン看板としても利用した。

もう一つ特徴的なデザイン要素として、地面に打たれたカラフルなコート罫がある。展示で関心が集まりやすかった【記号的な地面の表現】を再解釈し、バスケットコートのフリースローサークルや3ポイントライン、あるいは家具を並べる手かりとなるような補助線を地面に引いた。プロムナードから見下ろすと、このラインが全て円弧であることがわかるのだが、単純な幾何学図形を用いて恣意的になり過ぎないデザインを試みた。

一断絶的な可塑性

このプロジェクトにおいて「可塑性」の概念が試されたのは、6案から地面整備案への移行においてである。案の形式としては「断絶」しているのだが、6案がなければこの地面整備案は生まれなかつただろう。6案の展示から得たキャンパス利用者の思いの断片を建築的要素に翻訳し、それらを重ね合わせるようにして今回の地面整備案がつくられている。

9月にはついに広場がオープンした。特にバスケットゴールが人気で、京大生はもちろん、地域の小学生も遊びに来てくれているようだ。土でできた広場は足跡やボールで踏み固められ、あるいは雨風で地形の角がとれて、少しずつ表情が変わってきた(そういう意味でも可塑性な広場である)。広場がどこまでそれに近づけたのかはわからないが、「生きられた質」を持って設計された空間は、実際に生きられる段階へとスムーズに移行するのだろう。

今後は、広場でのイベント企画や屋台などの什器設計も構想している。さまざまな人が広場に足を踏み入れ、思いを馳せたことを取り込んでいった先に、最終的にこの広場に6案のように元気な建築が立ち上がるのか、あるいはまったく別の何かになるのか。これは桂キャンパスの仲間たちと育てていく建築なのである。



図8 地域住民に利用されている広場の様子

Talk about 桂新広場プロジェクト

平田晃久、岩瀬諒子、大須賀嵩幸、齊藤風結、高橋あかね、多田翔哉、中島安奈、菱田吾朗、前田隆宏



—可塑性で何がいえるのか

平田——「生きられた公共建築」というのはどこか矛盾したような言葉ですが、僕が「太田市美術館・図書館」でやろうとしたことと通じるものがあると思います。「太田」ではプロポーザルで選ばれた箱とスロープという形式を、市民ワークショップの場でどこまで壊せるかという新しい線引きを提示することを試みました。そこまで投げ出すことができたのは、実は僕が作り手として絶対にまとめあげる自信があったからなんですよ(笑)。そしてやってみるとやはり、楽しいという実感がありました。

前田——いろいろな要件によって案が攪拌されても元の特性が失われないように、ロバストな形式が設定されていたんですね。

平田——でも、形式がロバストだというのは割と古い話だったりもする。大須賀くんが論考で述べている「可塑性」は、それとどう違うのかな。

大須賀——ロバストネス(剛健性)の他にもレジリエンス(回復力)やリダンダンシー(冗長性)という似た言葉もあり、いろいろな人がいろいろな意味で使っていて非常にややこしいです。僕が可塑性に着目した理由は今のところ二つあります。まず、作り手と使い手の両方を想起させる概念であることです。例えばレジリエンスは、外圧で仕方なしに変化するような状況をどう克服するか?というつくる側の論理ですが、可塑性はつくることと変化することが同列にある。変化を肯定的に捉えることで、使い手との協働もポジティブに捉えられると思ったんです。もう一つはマラブーがいう「かたちを爆発させる」という意味にみ

られる、連続的なものだけでなく断絶的なものまで扱えるような射程の広さです。「生きられた建築」を考えるなら、生と対になる「死」についても何か考えてみたい。それは建築における連続と切断の議論にも関わってくる。

平田——例えば「新建築社 北大路ハウス」のふろしき案の中でいろいろと試したのは、大須賀くんも論考で触れている連続的な可塑性が作用したといえるのかな。

大須賀——そうですね、「北大路」では研究室やワークショップメンバーたちと集団でやっていくなかで、コンセプト的なふろしき案が徐々にたくましくなっていき、最終的に立ち上げることができました。でも本当はもっといろいろなことが起こっていて、マラブーの爆発を踏まえて振り返ると、選ばれなかった案もけっこう重要だったんじゃないかと思ったんです。そんな気づきもあって、桂新広場ではまず6個案をつかって投げ出してみることにしました。

— 6案の何が新しいのか

平田——普段、設計事務所ではいくつも案を考えるように、6つの具体的な形をつくったこと自体は別に珍しいことではないよね。今回、何を新しくやろうとしたの？

大須賀——具体的な形を出すことで、桂の学生の間に潜在的に漂っている記憶や意識をからませることができないかという議論がありました。もし案がその形を失ったとしても、案に触発されて出てきたものは引き継ぐことができます。

齊藤——複数の案を出すのは、従来の図式のように形式性が強くなりすぎないようにという意図がありました。しかし6案の中に、もう少し抽象的でキャラクターの定まっていない、だけど「ひだ」の多い、いろいろな使われ方を想起できるような案があってもよかったようにも思います。

中島——例えば版築によるB案では、壁を建てて場所を囲い取るという案の純度を高めるために、壁の上に登って見下ろせるといった他の要素がなくなり、案が途中でガラッ

と変わりました。元の方向性そのまま、他に可能な要素も盛り込んだ抽象的な案を出していたらどうなっていたのか気になります。

岩瀬——6案もある場合、キャラクターがはっきりしていないと違いが分かりませんよね。敢えて純度の高くないぬるっとしたような案を用意したらどうなるのでしょうか。

平田——例えばバスケットコートがあればバスケットがしたい人はそれに投票するように、記号化すると1対1の対応が生まれます。ぬるっとした案はそうではないからあまり人気がないでしょうね。

大須賀——それは投票の結果にも出ていて、一番記号的なD案が人気でした。

平田——とはいえ、僕はいつも、一見して記号的で分かりやすいものではないものをつくらうとしています。絶対にその方が面白いんです。だからコンペに出す時は分かりやすい案を仮想敵として、どんなアクティビティや風景が展開されるかがきちんと分かるように注意してやっています。必ずしも多くの意見が集まることがいいのかは分からない。出てきた意見を吸収してまとめあげることは、人気投票で一位のものをつくるポピュリズム的な発想ではありません。他力本願で投票をして、皆が考えていることをやれば良いということになると、建築家の存在意義を問われる話にもなりかねない。その辺をきちんと捌いて話さないといけないと思います。



食堂での6案の展示の様子



左：地面整備案
研究室でのスタディ風景

右：地面整備の現場写真
現場では学生も円の釘打ちなどに参加した

—なぜ地面整備にしたのか

大須賀——6案の展示が終わって次はどうしようかというときに、年度内に何かつくれないか？という爆発的な条件が降ってきました（笑）。

岩瀬——予算が少ない中で何かやろうとなった際、地面整備案ではない、単管パイプで屋根を建てたり、Bの版築案をつくる案も出ていたと思います。

中島——その頃はまだ6案に引っ張られていたのですが、一つを選んでつくってしまうことが本当にいいのか？という議論があり、一度割り切って新たに場所を設えようと思いました。

菱田——予算が決まり、スポーツのコートをつくる案、線で何かを描く案、オブジェクトを建てる案の3方向が出て、最終的にそれらを組み合わせる方向性になりました。

大須賀——そうして、人気投票の結果から1案を選ぶのではなく、いろいろな意見を僕らが翻訳した上で全く別の地面整備案をつくりました。地形の操作や円弧のラインなど、行為と1対1ではない匿名的な要素を組み合わせ、使い方を見出せるような場所にしているのが今回の面白いところかなと思います。

岩瀬——形態自体はリセットされているけれど、形態が生まれる以前に言葉たちが存在することは、設計プロセスとしては連続性のある状態を生んでいそうですね。

菱田——予算や工期など厳しい条件の中で、6案から出た考えや集まった意見をどう地面整備に繋げるか、頭を悩ませました。

平田——建築はたくさんの人の中でつくっていくので、時間をかけても連続的にはいかに全然大きく違うことも起こってきます。まさにそういった「プラスチック爆弾」的な状況に対して、可塑性を考えることはやっぱり必要ですし、それが世界の豊かさなのかもしれない。6つ案を出したことも正しかったのかは分からないけれど、今回のようにやり

方が定まっていなかった物事を進めるときは、反省しながらその都度調整していくものだと思います。揺れ動く中である一定の時間が経つと、何らかのバランスが生まれてくるかもしれないですよ。

大須賀——展示では形に対しての意見や批判の方が多く、場所に対する欲望やイメージがそこまではっきりと出てきませんでした。やはり実際に使ってみた方が使い手いろいろと考えられるのかなと思います。

前田——6案のスタディをしているときは、本当にあの場所が変わって何かが起こるのだろうか、京大生が集まるのだろうか？という一種の疑いのようなものがありました。今度広場がオープンして、実際に人が入ったときの使われ方を見た状態で次の案を出すのは、全く心持ちが違っていると思います。そういう意味でも前段階的に様々な可能性を受容できるものをつくったのは、意義が大きいですね。

多田——仮にまた投票をしても人気具合が変わってきそうですし、広場を使ってみた結果で案の可能性が広がりそうな期待がありますね。

—不連続と継承について

岩瀬——試しながらつくることのあり方をきちんと位置付けていくことに意義があると思います。6案の意味とも繋がりそうな「不連続」と「継承」について考える時、釜石の復興事業である「釜石市立釜石東中学校・鶴住居小学校・鶴住居幼稚園・釜石市鶴住居児童館（小嶋一浩＋赤松佳珠子）」と「釜石市立唐丹小学校・釜石市立唐丹中学校・釜石市唐丹児童館（乾久美子）」を思い出します。小嶋さんは実際にそこからなくなってしまったものをベースに、とても力強い建築をシンボルとしてつくっている一方で、乾さんはその場所の構成を読み解いて質だけを継承して、変わらないものがあることの安心感や価値を全く新しい建築で提示しています。両方とも素晴らしい建築ですが、全く違うものをつくっているのに質は変えていないという乾さんの建築のようなあり方は、今回のプロジェクトで連続性について議論したときに参照になるのかなとふと思ったんです。

平田——小嶋さんたちがやった「鵜住居」は、かなり被害を受けていました。足を切断されてしまって義足をつけなければいけないような状況です。乾さんがやった「唐丹」は、全ての街並みがなくなったわけではなく、かさぶたのように修復していく感覚がありました。その違いが大きいと思います。どちらも感動的ですが、乾さんの方はある連続性の中で捉えることができますよね。

岩瀬——既存や継承するものがある中での連続的な設計の手つきに対して、今回は連続的に扱おうとしたときにそもそも寄り添うものがないので、6案を既存的な存在として扱って継承するという流れだったわけですね。

高橋——既存という形態のイメージがありますが、ここでは6案を考える中で浮かび上がったこの場所のポテンシャルや、ここでやりたいことも含んだことを共有していたのかなと思います。

平田——広場の設計を依頼してくれた工学研究科長の大嶋先生も指摘されていますが、大きな文脈として桂キャンパスでは人のアクティビティが見える場所がないという問題があります。だから「プラスチック爆弾」を爆発させて、皆がもっている潜在的な欲望を顕在化させるような状況をつくらうとしているんですね。ここでの継承の対象は、今までなかったんだけどなんとなく皆が思っている「あり得たかもしれない姿」、あるいは「もう一つの桂キャンパス」みたいなものだと思います。

大須賀——ほとんどの学生にとって桂はもの寂しいところで変わることはないという意識だけがあり、「つくる」という発想が皆の頭のない状態から始まっています。既にあるものを継承するというよりは、何かつくれるかもしれないという意識を耕すために、6案の案がまず狼煙を立てたのだと考えています。

—現実を実験化して建築をつくる

平田——先に形をチラッと見せておいて、きっかけとなる土壌だけまずつくってしまうというのは、現実を実験化するようなことですね。そこに人がやってきて使っている

うちに、ここってこんな風に使えるんだという場所の発見もあると思います。そうするとまたリテラシーが耕された人の中で、新しいアクションが起こる可能性すら生まれるわけですね。あの場所自体が変わるのか、それとも桂キャンパスの他の場所に対する意識すらも変わっていくのか。自分たちが住んでいたり暮らしていたりする場所に対して、多くの学生や教員、住民が何か意識をもつことによって、もしかしたら10年とかいうレベルかもしれないけれど、桂が全く違う場所になるという事態も起こり得ないような気がします。

大須賀——リテラシーを耕すという意味においては、前期に院生の皆と取り組んだ実習課題も似ていますね。桂キャンパスを敷地にリサーチやプレスト的な設計から始めて、成果として5つのキャンパスポテンシャルと、プロムナードを拡張するような屋外空間の3提案にまとめました。最終的に3つとも道を伸ばすような提案になり、大嶋先生に見せたら「君たちは空中回廊が好きなの？」と突っ込まれてしまいました(笑)。

岩瀬——建築の設計提案を通じて、その場を観察し、潜在的な可能性を顕在化させるような手法は面白かったと思います。皆は設計をしたことによって桂キャンパスに対する見方は変わりましたか。

高橋——広場もそうですが、特に実習をやったかなり見方が変わった気がしています。ある建築を置いてみたときのあり得たかもしれない桂の姿というのを、私たちはある程度想像できてしまいますが、うまくいろいろな人に伝えるにはどうしたらよかったのかなと考えています。

平田——携帯をかざして、ARとか本当にできると良いですね。

岩瀬——最近は施主とのやりとりもオンラインなので、設計している空間をリアルタイムレンダリングのTwinmotionというアプリケーションで共有すると、ここでどんなことをしたいというような使い方のイメージをたくさん教えてくれます。良くも悪くも模型で上から見ていた状況とはやっぱり違って、ARやVRによってアイレ



2020年度「建築設計実習 桂キャンパス プロムナード・スタディーズ」

大学院生を対象とした建築設計実習（担当教員：平田晃久、岩瀬諒子）の講義にて、桂キャンパス全体をリサーチし、3つの設計提案をおこなった。

左上：Sector1 プロムナード・クロス（宗和尚吾、久永和咲、菱田吾朗）

右上：Sector2 プロムナード・ビスタ（伊藤克敏、新靖雄、高橋あかね、太井康喜）

下：Sector3 プロムナード・ブランチ（大須賀嵩幸、大橋茉莉奈、多田翔哉、湯川絵実）

ベルでの想像力は補えそうですよね。

平田——我々が想像していること以外にもっといろいろなことが潜在的にあって、それをちゃんと引き出した方が絶対に面白いことが起こるはずですよ。今はいろいろなことを顕在化させるツールがものすごく発達しているから、専門的な知識で鍛えられていない人でもそれが表現できますよね。

岩瀬——実際に広場ができたことにより、模型に寄せられていたときよりも具体的で洗練された意見が集まってくると、リアルでつくっていくことの意義も出てきて面白いですよね。机上の案でやっていたときと違って、段階的に整備したり使い始めたりすることで意義が変わってきそうな気がします。

大須賀——色々な意見が出る中でうまくモデレートしないと本当に使うだけになってしまうので、方法は工夫する必要がありますね。

平田——どうするのが一番京大生にからまっていくのでしょうか、あまり宣伝しすぎるとだめかもしれないですね（笑）。良い建物だけれど学生とは全然関係のない位相で建ちあがった図書館の横で、明らかに今までとは異質なもの小規模だけれど起こっているという違和感は面白いですよね。

菱田——桂キャンパスに対して一種の諦念みたいなものがあったと思うんです、僕らの生活の中で。そういうものが自分の肌感覚としても変わってきて、キャンパスに行こう！と思えるようになりつつあります。研究室の他に図書館も、さらにその横でも過ごせるとなると結構生活が変わるような予感がしています。

平田——現実世界はたくさんの人が動いていて、光が差し込んで、そういった膨大な計算の結果生まれているともいえるわけですよね。自然現象が複雑な計算過程だと捉えられるなら、この広場をつくるときも、現実に投げかけをした方がいろいろな人の思考が入り込んで計算過程が進んでいくのだろうなと思ったんです。そこで考えたことや表現されたものを全部生かして建築をつくるのであれば、ものすごく素晴らしい場所が生まれて歴史に残る建築になるのではないかという基本的な理想があるんですよ。

大須賀——われわれは6案出したり地面をしつらえたり、あの手この手で計算を加速させているわけですね（笑）。広場で誰かがバスケをしているのを見たり、あるいはネット上でややシニカルな反応などを見たりすると、自分たちが投げかけたものでちょっとずつ世界が変わっていくことにささやかな興奮を覚えます。現実を実験化してそこから建築をつくるやり方は、「生きられた公共建築」を設計する一つの指針になりそうです。

